日本歴史文学館 7

室町抄

覇権への道

南條範夫

日野一族の大いなる期待をになって、八代将軍足利義政の正室となった黒い巨きな瞳をした美貌の持ち主、日野富子。だか、彼女は野心的で生意気、かつ我儘で自惚れのつよい性格だった。義政の妻として、また九代将軍足利義尚の母として、室町幕府のなかで権勢をふるった富子の生涯を、応仁の乱を挟む激動の時代を通して、重層的に描いた傑作長編。

講談社

日本歴史文学館

7

南條範夫

室町抄

覇権への道

日本歴史文学館　7

室町抄／覇権への道

著者　南條範夫
装幀　加山又造　熊谷博人
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一
電話〇三(九四五)一一一一(大代表)
印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
製函所　株式会社岡山紙器所
第一刷発行　昭和六十三年八月二十日
定価　二三〇〇円
©1988南條範夫
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。
Printed in Japan
ISBN4-06 193007-9 (0) (文二)

目次

巻頭口絵　日野富子　村上豊　挿絵　村上豊

室町抄……5

覇権への道……257

巻末付録

対談　室町時代と日野富子……449

年譜……474

参考文献……503

別冊付録　歴史文学ハンドブック

写真図録　室町抄

作品鑑賞のてびき

連載「歴史文学夜話」〈30〉　尾崎秀樹

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

室町抄

——日野富子に関する四人の証言——

第一部　押大臣日野勝光

――文明八年（一四七六）五月

一

私は、この五月十六日（文明八年）、左大臣に任じられた。日野家としてはむろん、未曽有のことである。このために私が、強引な工作を行ったことは否定しない。

私が左大臣になるためには、前任の九条政基が左大臣の地位を空けてくれなければならなかった。そこで私はまず、関白二条政嗣を退隠させ、九条政基を関白にまつり上げ、その後任として私が左大臣になったのだ。前関白には、彼自身が眼をむいたほどの豊富な金子が贈られたことは言うまでもない。

思えばずいぶん長い道のりであった。三流公卿の次男坊の私が、ここまで経上るには、どんなに、どれほど、頭をつかい、からだをつかったか分らぬ。先に内大臣になった時、私は押大臣などという綽名をつけられたが、今度は、何と言われることか。何と言われようと私は世評など歯牙にもかけぬ。左大臣になったからといって、これで満足している訳ではないのだ。この頭で、この腕で、私は私の将来をもっと大きく切り拓いてみせる。

私の運命が大きく旋回したのは、嘉吉元年（一四四一）、私が数え年十三の夏であった。公方（足利義教）が殺されたという夢想もしなかった報せが届いた時、日野邸内に漲った異様な空気を、私ははっきり覚えている。私の叔母重子は公方の側室として、二人の男児義勝・義政を生んでいた。日野一族の運命はこの関係にかかっていると言ってよい。だから公方が殺害されたという凶報によって人々の最初に感じたものは、頭の中が一瞬空白になってしまったような恐怖と驚愕とであった。それは邸内の誰の表情にも態度にも言葉にも現われていた。まるで、凡ての人々が突如思考力を喪って、虚脱状態に陥ちこんだようだった。

だが、やがて、一様に、奇妙な表情と態度の変化が現われてきた。前のものほど明白な、急激な、顕なものではなかったが、やや恥じらいながらも滲み出てくるように現わ

れてきたのだ――それは、次第に濃くなってくる安堵と悦びの色とであった。少年の私は、その不可思議な雰囲気に、とまどい、自分の思考の方向を決めかねたものであった。

日野一族は、その頃、極めて沈鬱な、不安な状況の下にあった。公方は、三代義満以来の慣習に従って、日野家から正室大方殿を迎え、その妹重子を側室とし、これに後嗣を生ませていたにも拘らず、明らかに日野一族を嫌っていた。正室が死ぬと、後嗣義勝の生母である重子を正室に直すことなく、新たに三条尹子を正室とし、その妹を側室とした。そして義勝を尹子の養子としたのである。

重子の兄であり私の父である日野義資は、数年前公方の機嫌を損ねて閉居を命じられた上、公方の内命を受けた刺客によって殺された。義資の嫡男政光は、恐怖に駈られて退隠した。次男の私が兄政光の養嗣として日野家をつぐことになったのはこの為なのだ。その直後、一族の日野兼郷が、公方の怒りを買って封を奪われた。何故か公方は日野一族を眼の仇にしたようなところがあり、一族の女人がその側室として後嗣を生んでいるにも拘らず、一族の運命は決して明るくはなかった。

公方が、側近の者に呟いたことがあるという。

――将軍就任の条件の一つであったから、一応、慣例通り日野の女を正室に迎えてやった。その妹を側室にしてやった。そいつに男児が生れたから後嗣としてやった。だが、はっきり言って、自分は日野一族は大嫌いだ。三代公方以来、足利家に喰い込み、あらゆる策動をし、出過ぎた真似をしおった。今後は絶対にそのようなことは認めぬぞ。

そして彼はこの意向を明白な行為に現わしたのだ。大方殿の在世中も、その面前で美女数人を引寄せて戯れ、その中の二人に、伽をせよ、と命じ、両腕に引っかかえて閨房に消えていったことがある。後嗣を生んだ重子でさえ、全く無視され、理由のない侮蔑を受けていたのだ。彼が生きていたら、自分の後嗣の妻には、決して日野家の女を迎えなかったに違いない。

公方義教は、どこか異常に残忍なところがあったようだ。彼は、十歳の時、青蓮院に入れられ、天台座主として仏法界に生涯を終える筈であったのが、三十五歳になって、突然、兄義持の死去に遭い、還俗して公方の座についた。将軍位につくと、およそ仏門にあった人とは思われない傲岸な性格を示し、少しでも自分の意に逆らうものは、公家・武人・神官・僧侶を問わず、片端から処罰し、殺戮

した。

将軍としては極めて有能だったと言ってよい。朝廷と幕府の紀綱を改革し、関東公方持氏を征討し、擾乱の九州を統一し、比叡山を制圧し、有力守護大名を粛清し、ほとんど狂気とも思われるほどの独裁ぶりを示した。

私がこの公方を間近で見たのは、たった一度しかない。永享十二年の秋、猿楽見物の席に列した時であった。公方は、ひどく陰気な、苛々した瞳をし、薄気味の悪い妖気のようなものを漂わせていた。

ちょうどその頃、日蓮宗の日親の一党が、公方を折伏しようとした罪で投獄されていたが、その獄舎は広さ四畳、高さ四尺五寸、天井からは大釘が櫛のように突出していた。そこに十数人を押し込んだ。日親は断乎として折伏をやめない。公方はついに日親の頭に灼熱した鍋をかぶせるという惨忍な拷問を加えたという。そうしたことを聞いていたせいもあって、十二歳の少年であった私は、公方が突然、彼の体内に充満している狂的な憤怒を爆発させて、その場にいる者すべてをみな殺しにしてしまうのではないかというような怖れにふっと捕えられ、思わず肩をすくめたことを忘れない。

この公方が嘉吉元年六月二十四日夜、赤松満祐の招きに応じて、西洞院二条の赤松邸を訪れたが、猿楽見物中、武装した兵三百に包囲されて惨殺されたのだ。満祐は公方がその所領を奪って寵童赤松貞村に与えるのではないかと疑って叛逆したという。私が猿楽見物の席で恐れたのとは反対に、公方の方が殺されてしまったのだが、私の意識の中では、その二つの恐怖が交錯し混乱し、その後久しく、猿楽その他大勢の集まる席に列するたびに落ち着かなかった。

ともあれ、公方義教に睨まれている限り、日野家は結局、陽の目をみることはあるまいと覚悟していたのだが、彼の突然の死によって、すべては一変した。日野家の頭上にあった暗雲は一挙に吹き飛ばされたのだ。

義教の後は、当然、義勝が襲って第七代将軍となった。だが、義勝は、その翌々年七月、わずか十歳の時、落馬によって病臥し、余病を併発して夭折した。八歳の弟義政が後を嗣ぎ、第八代将軍となった。

二代つづいての公方の生母として、重子の勢威は急激に高まり、日野家は再び権力の地位に立つ機会を与えられた。私が十三歳以後、極めて順調に出世していったのは、そのお蔭だ。私は公方の殺された嘉吉元年十一月に元服し、文安三年十八歳で右少弁、翌年蔵人、宝徳三年十月参

議、翌年二十三歳で権中納言となった。その間、叔母重子の推挽が大きく物をいっていたことはいうまでもない。

叔母は私を愛してくれた。私が余りにしばしば叔母の許に赴き、室町御所内に寝泊りすることさえ珍らしくなかったので、私を男にしたのは叔母だという噂さえあったと聞いたことがあったが、全く莫迦気たことだ。断じてそんなことはない。叔母は私を、日野家の柱石として、日野一族の将来を私に托していたのだ。のみならず、私が、私よりもそれぞれ五歳・七歳年少の義勝・義政の最もよき腹心となることを期待していたのだ。義勝が早世し、義政が八歳で将軍の後嗣となった時、叔母はそれを繰返し私に言って聞かせた。

「若君は、からだもあまり御丈夫ではなく、武張ったことはお嫌いな方、どうやらお気の弱い性格らしい。亡き普広院殿（義教）のような荒々しい御気性よりは、危くなくてよいと思う一方、諸大名を統制してゆくお力があるものかどうか、心許なく思います。そなたが何とかもり立ててくれねばなりませぬ。人一倍利発な、そして気性の強いそなたを見込んで、くれぐれも頼みまするぞ」

叔母は、本来、優しく静かで、おとなしく控え目な女であった。義教にずいぶん踏みつけにされていたにも拘らず、じっとそれに耐えてきた。義教の死後、彼女が、正室の三条氏をはるかに超えて衆望を集め得たのは、新将軍の生母であったからであるに違いないが、その人柄が、多くの人々に愛され、慕われていたからでもある。

権勢の地位に押し上げられてからも、彼女は極めて謙虚で、細川・畠山・斯波三管領家の合議制に一切を委ね、あえて口を挟もうとしなかった。いずれ義政が成人したら、親ら政治を行うだろう、そしてその時にこそ、心を許せる腹心が必要なのだ、血のつながるそなたに、その役割をつとめて貰いたい、というのが、私に対する叔母の願いであった。

「管領も諸大名も、心の底から将軍家のことを思ってはおりませぬ。普広院殿が弑された時、座にあった武将は、管領を始め、誰一人、身を以て将軍家を庇ったものはおらず、慌てふためいて、われ先にと逃げ走ったと聞いています。彼らは自分の権力、自分の安全しか考えていないのです」

と、叔母は口惜しそうに言う。私は、すぐに憎まれ口を利いた。

「それは誰でも同じでしょう。みんな自分が一番可愛い。私だってそうですよ。あんな場合になったら、公方を助け

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co

るより自分の命を助けるのに夢中で、逃げますよ」

私は笑いながらそう言ったのだが、私を愛している叔母は、それを言葉通りには受け取らず、私の偽悪的性格――それを彼女はいつも指摘していたのだが――の現われだと信じた。私の方は、叔母がそのように好意的に誤解するだろうことを予想して、わざと憎まれ口を――笑いを以て薄めながら――利いたのだが、私の本心はその言葉通りだったのだ。私は将軍家の為に力を尽くす。だが、それは、そうすることが日野家、いや、この私の為になる限りにおいてだ。私にとっては、将軍家より私自身の方が遥かに大事であることは当然ではないか。

義政は、母に溺愛され、保護され、典型的に柔弱に育った。亡父義教の凄まじい気力のかけらも持っていない。文安四年四月、武芸訓練の為の犬追物を始めて見物したが、御所に帰ってから、

――騒々しくて、いやなものだ。

と顔をしかめていたという。

宝徳元年、十四歳で元服の式を挙げ、正式に征夷大将軍の地位についた。(兄義勝の死後、この時まで、将軍位は空白だったのである)

新公方は、文学や芸事には極めて熱心で、この頃から、桐の木で筆を作らせたり、座敷の障子に四季の花を描かせたり、廷臣たちを集めて詩歌の会を催したり、年に似合わぬ風雅の嗜みをみせた。

一方、女人についても、義政は異常な好みをみせていた。これは明らかに父義教の遺伝らしい。義政に始めて閨のことを教えたのは、乳母の今参局であるが、十五歳の時には、早くも一色右馬頭の娘に女児を生ませているし、今参局との情交も引続き行われていた。

あの今参局――私たちはお今と言っていたが――の妖しい容姿は、彼女が死んでから十七年経った現在でも鮮明に想い出せる。白い細面、挑発的に光る瞳、薄い上唇と厚い下唇――みるからに矜持の高そうな、強烈な野心をひそめた顔立ちだ。どうかすると、美しいと言うよりも怖ろしいと言った感じを与えるから、恐らく誰にでも好かれる顔ではないが、特定の人にとっては、ほとんど抵抗し難い絶大な魅力を持ったであろう。そしてその特定の人が、ほかならぬ公方義政だったのだ。

お今は、近習衆の名門大館持房の従妹で、公方より十六、七も年長であった。乳母が最初の女になるという例は決して少なくはなかったが、こうした場合、彼女は、母親と愛人との双方を兼ねる。この二つの最も烈しい愛情に抱

かれて、男は、本能の底に深く睡っている母子相姦の感情に似た完璧な満足感を獲得するだろう。それは男の成長につれ、多少とも罪悪感に近いものを、双方が共感するために、より甘美になるのかも知れぬ。母であり女であり恋人であり妾でもある女――これ以上、男にとって魅惑的な存在があり得ようか。だから、少なくも彼女が若さと美しさとを維持している限り、男は完全にその下衣の下に抱きしめられて動きがとれなくなってしまうのだ。女にもし野心があれば、どのようにでも男を動かせるだろう。

お今は、若い将軍義政を自由に操った。政治に喙を容れたことはいうまでもない。それは、彼女と、公方の寵童有馬持家、烏丸資任の三人の肖像を描いて、三魔（おいま、ありま、からすま）と記した落書が洛中の街頭に立てられたほど、隠れない事実であった。

叔母重子がもっと強い性格だったら、何とかお今を抑え得たであろう。公方は割合に親孝行であったから。だが、重子は争いを好まない性質なので、お今は傍若無人に振舞った。それでも、叔母がさすがにたまりかねて、身を以て抗議したことがある。といっても、その実、私が叔母をそそのかして、そうさせたのだが。

宝徳三年のことだ。お今は公方を動かして、尾張守護代織田敏広を罷めさせ、引退していた兄郷広を復活させようとした。むろん、多くの賄賂と強い請託を受けてのことだ。叔母はかねて親しい尾張守護斯波義敏から、

――万一、そのようなことになれば、尾張国は収拾し難い大騒乱になります。

と訴えられていたので、義政にそれを申入れたのだが、お今に丸めこまれた義政は全く耳を貸そうとしない。叔母の面目はまるつぶれになりそうだった。

私は躊躇する叔母にすすめて、室町御所から嵯峨に出奔させ、強硬な反対姿勢を表明させた。その上、私は、管領以下有力大名を必死に説いて回った。私は自分の説得力にかなりの自信をもっていたが、それよりも諸大名の叔母に対する好意と、お今に対する反感の方が強く働いたのだろう、ほとんどすべての者が叔母を支持し、お今を攻撃し、お今の処分を強く公方に迫った。気の弱い公方は、少なからず驚いたらしい。慌てて守護代の更迭をとりやめ、お今を一応、洛外に引退させることにした。

お今は、これで止めをさされたかと思われたのだが、彼女のしたたかさは、しつこく公方に働きかけて、間もなく再び御所に戻ることに成功した。恐らく、お今のからだを忘れ得なかった公方の方からも手をさし伸べたに違いな

い。お今は御所に戻ってくると、堂々と、少しの負け目もみせず、以前にもまして、公方の寵愛を誇示した。

私は自分が、結局お今に敗退し、お今に侮辱されたように感じた。叔母も同様だったであろう。私はお今が、私を憎み、恨んでいることを知っていた。彼女が権力を握っている限り、私が権中納言正三位以上に昇ることを、あらゆる手を用いて妨害するだろう。何とかせねばならない――康正元年（一四五五）、すでに二十七歳になった私は、この局面を打開しようと心を砕いた。

叔母が、私に新しい相談を持ちかけてきたのは、ちょうどこの時点においてであった。

「将軍家はもはや二十歳、正室を迎えねばなりませぬ、それも慣例通り日野家から。――私は、富子が良いと思っていますが」

兄の長女富子は私の妹ということになっているが、それは私が兄の義嗣子となって日野家を嗣いだからで、実は私の姪に当る。私より十一歳年下の十六、年頃からみて、ちょうど公方にふさわしい。そして、日野一門の年頃の女人の中では、飛び抜けて器量がよく、しかも利発であった。

富子は黒い巨きな瞳をし、豊かな頬は血色が良く、態度が大らかで、親切と我儘とが共存し、健康で敏捷でいきいきしている。からだ全体としてはむしろ小柄なくせに、時には妙に堂々としてさえ見えた。

美しい身内の女には、当然、好意と愛情とを持つはずだ。叔母は私が富子を愛し、お互いに融和しているものと考えたらしい。ところが、私は富子が好きでなかった。何となく肌が合わない感じであった。

尤もそうした違和感を分析してみれば、原因はもともと私の方にあったかも知れない。私は次男坊であり、部屋住みであった。自分の才能には大いに自信をもっていたが、将来の栄達については全く期待が持てず、子供心にも憤懣と鬱屈の日を送っていた。それが、思いがけなく兄に代って家を嗣ぐことになり、正直のところ欣喜雀躍した。その反面、僥倖によって獲得したこの地位に対し、内心の照れくささと、外面的な気負いとがあった。

家付の娘である富子は十一歳も年下であったから私は彼女を無視するような態度をとっていた。それに対して富子は、成長するにつれ、私のその立場、その気負いを感じとって、心の底で私を、揶揄し冷笑しているかのように見えることがあった。だが、私はその後の自分の昇進は、叔母の庇護があったとはいえ、主として自分の能力と活躍とによるものだという自信をもっていたから、次第に富子のこ

のこましゃくれた生意気な態度は、気にもとめないようになってきていた。

にも拘らず、富子との間は妙にぎくしゃくしていた。彼女は年頃になるにつれて、明るく陽気で多弁で、よく笑い、よく怒り、よく哀しんだ。行動的・外向的で人見知りをせず、自信が強く、自己顕示欲も強く、野心家でもある。これらの特徴はすべて、私にも妥当することだ。その限り、お互いに似ていると言ってよい。

日野家には、しばしば極めて野心的な行動力のある男が生れている。元弘の昔、後醍醐帝の討幕計画に加わった日野俊基・資朝、少し後、足利氏の為に大いに働いて北朝における黒幕的存在となった三宝院住職賢俊などがその著しいものだ。義教が日野家を忌んだのは、こうした日野家の血の故であろう。しかし、日野家の女人は、概して叔母重子のようにおとなしく謙虚なのが血筋である。富子のようなのは突然変異に属するだろう。

人々の中には、富子と私とが似ている点を強調し、血は争えぬものなどと、分ったようにうなずくものもいた。だが、私は二人の間に相似点を認めると共に、はっきりした差異をも認めている。同じく行動的・野心的・利己的であっても、富子の場合、それは全く本能的なもので、彼女を動かしているものは、主として感情と欲望とだが、私の場合はいつも合目的思考と綿密な計算とが、その背後にあったのだ。

それは、彼女は女であり、世間知らずであり、私は男であり、多少とも世間を知っている為でもあろうが、より多く、性格的な違いであるというべきであろう。その後、しばしば、われわれは——富子と私とは——自分の運命を明日に賭けねばならぬ事態にぶつかってきた。そんな場合、二人とも、いさぎよくその賭けに直面した。だがその賭け方は違った。私は合理的に考え、狡く、冷静に賭けた。富子は非合理的に、熱狂的に、下手に賭けた——しかも勝ったのは、多くの場合、私ではなかった。

ともあれ、叔母から相談を受けた時点では、私は、富子と手を組まねばならぬと考えた。日野家が政界に送る女選手、将軍御台所の候補者として、差当り富子に代るものがいないとすれば、個人的な好悪の情は捨てて、彼女を利用するほかはない。私の合理的な計算の当然の結果はそうなった。

私は叔母が、富子を義政の正室として推したいと強く望んでいることを確認すると、直接富子にぶつかってみた。

「そなたも、もう年頃だ、嫁にゆかねばなるまい」

富子は、黒い瞳を、ひとしお巨きくしただけで、当然のように答えた。
「もう、どこへやるか兄上は決めていらっしゃるのでしょう。私は日野家の当主である兄上の御考えに従うよりほかありませぬ」
こういう言い方が、いつも、憎たらしく、気に喰わないのだ。
「私が、押しつけると決めていたのだね。多分、そうなるだろうな。だが、もしかしたら、それはそなたにとって、そんなに厭なものではないかも知れない」
私はちょっと言葉を切って、富子の顔を見返した。大胆な挑みかかるような瞳になっている。
「もし、そなたが全く自分の気持一つで嫁入るとしたら、どんなところに、いや、誰のところに嫁きたいかね」
「兄上が思いもよらぬ、とんでもない人の名を挙げたら、どうなさいます」
「むろん、だめだと言う。だが、それにしても、それがどんな人物だか知りたいものだな」
この女が、もう心の中で、自分なりに相手を決めていたのかと、私は少々驚いた。
「誰でもよい、その名を言ってごらん。この邸によく姿を見せる一族の若い男の一人かな。どうも大したのは、いないように思うが。それとも思い切って身分違いの河原者か。まさかそんなこともあるまい。五摂家大臣家の若殿を、評判だけ聞いて憧れているのかな」
「私はそんな莫迦々々しいことは考えていません。それに日野家の女としてふさわしい相手しか心の中にありません」
「それは頼もしい。で、それは、誰かね」
「お分りになっている筈です」
富子は、ちょっと人を小馬鹿にしたような色を瞳の中に走らせた。こいつも、いつも私の癇にさわる表情の一つだ。
「何かと言えば人の思っていることを勘ぐり、先に推測して得意がっているようだな、そういう性分は人にイヤな感じを与えるだけだ。聞かれたことに素直に答えた方がいい」
「兄上が、始めから素直に、御自分の思っておられることを言って下さればよかったのです。でも、構いません。私から申しましょう。私は、帝の許に上って后になるか、公方の所に嫁いで御台になるほかはないと思っています」
将軍の御台は、正しくこちらの考えていたことだが、帝

の后は考えもしなかったことだった。もしかしたら、この女は、わざと全く無名の同朋衆か、地方の小大名の名でも挙げて、私を愕かして、内心ほくそ笑むのではないか――とは考えたのだが。

私は、こいつめ、言いおる、という感じで富子の顔を見返したが、別に気負った風もなく、当然のことを言っただけという顔付きであった。それにしても、后か御台かを望んでいたとすれば、極めて健全だ。しぶといくらい健全だ。こいつ、全く年に似合わぬ早熟な、したたかな奴だ、いや、やっぱり、イヤな奴だと、私はそう思い、つい口に出してしまった。

「后か――」

「后か御台かと言いましたが、御台の方がよいと思います」

「何故だね」

「男の方なら、帝と公方と、どちらになりたいと思われますか。位の上では、帝に決っていますが、帝はただの飾りもの、天下の政は公方のものでしょう。男らしい男なら、帝より公方を選ぶのではないでしょうか。女子にしても同じこと、飾りものの帝の后よりも、実力者の公方の御台の方がよいと思いますけれど」

そう言ってから、富子は始めて、にっこりと頬をくずした。

「兄上も――大叔母さまも、私を御台所にするつもりなのでしょう」

「その通りだ」

私は、即座に、きっぱり答えた。完全に手の内を読まれてしまっていた忌ま忌ましさをごまかすために、必要以上に大きな声で。

「それにしても、御台に自分が適任だと決めていたとは、大した自信だな」

「公方の御台所は日野家からと決っています。日野一族の年頃の娘の中から選ぶとすれば、私以外にないでしょう」

「よし、それだけの自信があれば、大丈夫だ。日野家を代表して、将軍家に乗り込んで貰おう。叔母も私も、力の限り後援する」

「でも」富子が、不意に、狐のような眼つきになった。

「兄上は、私が大嫌いなのでしょう。本気で私の後楯になれるかしら」

あまりに率直な言葉に、私は、少しうろたえた。

「どうして、私がそなたを嫌っていると言うのだ？」

「兄上の態度をみれば分ります。ことに、それ、その眼つ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.co